

『観光のまなざし』 新聞での書評

『日本経済新聞』 1995年3月19日 書評欄（評者・山田登世子）[一部抜粋]

学問はいつも日常的経験に遅れをとる。暮らしの中で日々経験していながら語りおこされないものは多々あるが、「観光」もその最たるもののひとつだろう。海外旅行から一時の温泉ブームまでこれほどツーリズムがさかんなのに、学問はおろか、まともな論さえないのが現状だ。

そんななかでようやくでてきた観光論が本書である。著者のキーワードはタイトルにあるとおり、観光の「まなざし」だ。わたしたちは、何かを見たいと思ってどこかへでかけるのだが、わたしたちのその目の欲望はいったいどのように組織されているのだろうか？（中略）

遺産産業のしくみなど、イギリスの事例も読みどころのひとつだが、現在にきりこむポスト・ツーリスト論がやはりいいちばん面白い。

『朝日新聞』 1995年3月26日 書評欄（評者・柏木博）[一部抜粋]

冒頭からいきなり、身体器官に対する新たな記述（まなざし）の発見と変容について語ったミシェル・フーコの『臨床医学の誕生』からの引用ではじまるこの本は、タイトルにもまさに「まなざし」という言葉を使っている。観光もまた、フーコが語ろうとした「まなざし」の問題と不可分であり、観光の歴史的变化は、それを行ってきた人々や社会の「まなざし」の変容の歴史であるというのが、著者の理論的な大きな枠組みとなっている。

たしかに、観光は、温泉旅行や名所旧跡めぐり、そして博物館めぐりや流氷見物にいたるまで、何を選択するかは、わたしたちの思考や感覚をふくんだまなざし（それはもちろん文化的制度と深くかかわっているのだが）の差異を投影している。（中略）

本書は観光を対象に約二百年の文化変容を社会学的に捉える試みをおこなっているといえる。